

身近な先輩

西部 明子

金沢医科大学皮膚科学講座准教授

ワークライフバランスを左右する要素には、自身の健康状態や子育て・家族の介護があげられるだろうが、もっとも重要なのは将来の青写真を自分なりに描け、そこに向かって取り組んでいけるかどうかであろう。将来に対する漠然とした不安を具体化し対策を練るためには、いい相談相手やロールモデルとなる身近な先輩がいればたいへんありがたい。とはいえ、そのような存在に出会える人はそう多くないかもしれない。

翻って私はどうであろうか。ありがたいことに、健康や家族に関して大きな問題はない。でも私が入局したときには、医局は男性のみで女性医師はいなかった。身近なロールモデル、働く女性の先輩……私にとっては、母だったかもしれない。母は薬剤師・検査技師として大学病院に勤め、細々とではあるが研究を続け、学生指導にも関わっていた。子どもは4人いるが育休を取ることはむずかしい時代であり、産休のみ取得した世代である。仕事と子育ての両立がたいへんな時期もあったようだが、祖母が「私が手伝うから絶対に辞めないで」と何度もいっていたのを覚えている。祖母にとっては、自分が進学や就職を諦めざるをえなかったという経験もあって頑なだったのだと思う。

母からのアドバイスをいくつかあげてみる。

・手に職をつけなさい。免許のある仕事がいい。

私が大学進学で悩んでいたときにいわれた言葉である。母の世代では自立する女性はまだまだ少数派であった。母は薬剤師免許をもっており「お父さんに何かあっても、お母さんがあなたたちをなんとかできる」といわれたとき、医学部受験に母のお墨付きをも



らったと思った。

・複数のことを同時にやりなさい。後でやろうと思っても、できるとは限らないから。

器用で賢い人なら同時進行できるだろうが、私のような不器用な人間にとっては虻蜂とらずなだけ、との思いはいまでもある。だが、先延ばしにしたことをやろうと思ったときに気力や体力が十分にあるとは限らないのも確かだ。母は子どもたちが高校進学した後には、放送大学で古典を学び、お琴にお花と掛けもちしていた。定年後に始めるのは遅すぎると思ったらしい。

・数年のずれは人生の中で全然遅れではない。

私が体調不良で大学院を休学したときにいわれた言葉だ。当時は焦燥感が強かったが、年をとったいまとなっては、その通りだと思う。男女問わず育児や介護で予定が狂ったと思う人もいるだろうが、長い目でみれば「誤差」に過ぎないし、ほかに得ることのほうがきっと多いはずだ。

・部屋にお花を飾りなさい。心が豊かになるから。

私からもおすすめします！